

第17回 新日鉄音楽賞
受賞者インタビュー

作品のすばらしさが心に届く 時間と空間をつくりたい

ゲスト◎指揮者 フレッシュアーティスト賞受賞

下野 竜也^{さん}

プロフィール◎しもの・たつや

1969年生まれ。鹿児島県出身。鹿児島大学教育学部音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部付属指揮教室で学ぶ。1996年キジアーナ音楽院でオーケストラ指揮のディプロマを取得。1997年から1999年まで大阪フィルハーモニー交響楽団指揮研究員として、故朝比奈隆氏の薫陶を受ける。1999年4月大阪フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会で楽壇デビュー。文化庁派遣芸術家在外研修員として、1999年9月より1年間ウィーン国立音楽大学に留学、2001年6月まで在籍。2000年第12回東京国際音楽コンクール（指揮）優勝、併せて斎藤秀雄賞受賞。2001年第47回プザンソン国際指揮者コンクールで優勝し一躍脚光を浴びた。2002年出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。2006年11月読売日本交響楽団の正指揮者に就任。

プロ指揮者へのステップをつかんだのは、大阪フィルハーモニー交響楽団のオーディションです。指揮者には国家資格があるわけでもなく、将来に不安を感じていた頃で、薫にもすがる思いでこのオーディションを受験しました。そして運良く選ばれ、プロの音楽家としての一歩を踏み出すことができました。

村上 私は戦中派ですが、当時はB29などの敵機の音を聞き分けられるようにと、一部の小学校では音感教育に力を入れていました。先生が弾くピアノの音をクイズのように当てる音楽の授業が好きでした。また、機械いじりが好きで、たまたま家にあった古いピアノを調律するのを見たときに、部品をバラバラにしている様子にとっても魅力を感じて調律師になりたいと思いました。

戦後、ヤマハの入社試験に合格し、調律師の研修を受けました。そしてピアノ研究のためにヨーロッパに渡り、ミケランジェリやりヒテルなど、世界的に有名なピアニストの調律をさせていただく幸運に恵まれました。

指揮者とピアノ調律師の仕事のやりがいや喜びを教えてください。

下野 今日のオーケストラは良かったとか、今日の指揮者はおもしろかったというのは僕にとって誉め言葉ではありません。お客さまに「今日のベートーヴェンは良かった」と言っていたことが理想です。お客さまには作品の音だけが届き、オーケストラは作品の演奏だけに没頭できる時間をつくるのが、指揮者としての夢であり目標であり、やりがいです。村上 調律の一番の難しさは「いい音には答えがない」ということです。音階や音程は決まったとおりに調整すればいいのですが、演奏家には文字通り「紙一重」の差で理想の音があります。ところが、その要望は具体的ではありません。「もうちょっとブリリアンテ（輝きのある音）」とか、「歌うように」とか。その気持ちをいかに察するかが大切です。そして理想の音になかなか達しないときにも、あきらめない忍耐力と追求心が大切です。演奏家が求める理想の音に近づくことこそが、調律の一番の魅力です。



新日鉄音楽賞受賞おめでとうございます。まず、お二人が音楽の道に進まれたきっかけをお聞かせください。

下野 小学校の器楽部でトランペットに惹かれて、地元の鹿児島放送局が主催するジュニアオーケストラに入ったのが音楽の原体験です。しかし、音楽の道へ進む気持ちは全くなく、歴史が好きだったので将来は社会の教師になりたいと思っていました。

その後、教師を目指して鹿児島大学に入り、オーケストラ部でトランペットを吹きながら、指揮の先生が休みのときは代わりに指揮をしていました。大学卒業後に東京の桐朋学園大学付属の指揮教室で本格的に指揮の勉強を始めましたが、そのときは「指揮者になるんだ」という強い意志と「なれっこない」という弱気の両方がありました。両親からは「あんたがそげんとなれるわけなか。はよう帰ってきて学校の先生せんね」と、ずっと大反対されていました（笑）。



第12回東京国際音楽コンクール（優勝）の演奏

ピアノの響きの奥深さを通して 音楽の楽しさを伝えたい

ゲスト◎ピアノ調律師 特別賞受賞

村上 輝久さん

プロフィール◎むらかみ・てるひさ

1929年生まれ。静岡県出身。1948年日本楽器製造(株)(現 ヤマハ)に入社。1966年から1970年までピアノの音の研究のため単独ヨーロッパに渡る。ミケランジェリをはじめ、リヒテル、シフラなど巨匠ピアニストたちの信頼を得て、彼らの専属ピアノ調律師としてヨーロッパ、アメリカなど世界26カ国を回る。1967年マントン音楽祭(フランス)での仕事がドイツの新聞Die WELT紙上で「すべてのピアノをストラディヴァリウスのように変える東洋の魔術師ムラカミ」と大きく報じられる。帰国後はヤマハのピアノ製造部長、技術部長を歴任。1980年ピアノ調律師養成機関「ヤマハピアノテクニカルアカデミー」を設立、初代所長に就任。著名ピアニストの演奏会での調律の他に、全国各地の大学講座、レクチャーコンサートなどで、音楽史とピアノの仕組みの変遷や構造を講義し、一般に広める努力を続けている。

企業の中で組織をまとめあげることと、オーケストラで演奏者をまとめて音楽をつくりあげることには通じるものがあると思います。指揮をする上で大切にしていることは、どのようなことでしょうか。

下野 演奏者一人ひとりが積み重ねてきた経験やそれぞれの出す音を受け止めた上で、オーケストラと対峙すること、そして、作品を勉強することを通して自ら導き出した「根本」を見失わないことです。

こちらが妥協するとオーケストラとの信頼関係は築けません。意見の相違があった場合は、妥協するのではなく、相手を理解するために彼らが主張していることをまずやってみます。徹底的にやってみることで、彼らがなぜそう思っているのかがわかってきます。理解した上で、どう進めるかを考えるようにしています。

調律師が理想の音を出すために大切なことはどのようなことでしょうか。

村上 日々の仕事である、ご家庭から依頼された調律の仕事をしっかりやることです。地道な努力をせずに、演奏会のと きだけうまく調律しようと思ってもできません。

そして、演奏家とできるだけ会話をすることが大切です。「音はどうですか」としつこく聞くと、「うるさい。おれは集中したいんだから黙っている」と嫌われますから、演奏家の思いを察して調律し、相手が希望を言ってくれるのを待つのです。また、演奏会の場合は、会場や演奏家のスケジュールによって調律時間に制限があるため、その時間内で100%に近づけるために優先順位を明確にすることも大切です。

紀尾井ホールや新日鉄文化財団へのご感想と、今後の抱負をお聞かせください。

下野 私は、音楽を志したのが遅かったこともあり、すでに30代後半です。最初にフレッシュアーティスト賞受賞のお電話をいただいたときは、自分は「フレッシュ」というにはふさわしくない年齢だと思いました。しかし、30歳のときに、あるコンクールに合格したことを朝比奈隆先生に報告したと

新日鉄音楽賞：1990年新日鉄創立20周年と「新日鉄コンサート」放送35周年を記念して設けられた音楽賞。日本の音楽文化の発展と将来を期待される音楽家の方々の一層の活躍を支援することを目的としている。

フレッシュアーティスト賞：将来を期待される優れたアーティストに贈る賞。技術だけでなく、音楽性、将来性を重視し、広い範囲から選出。

特別賞：演奏家に限定せず、幅広いジャンルのなかから、音楽文化の発展に大きな貢献を果たした方に贈る賞。



ころ、先生から「あと60年だな」と言われたことを思い出しました。指揮者の30代はまだまだフレッシュなのだと考え直し、今回の賞を「もう一度スタート台に立ったつもりでがんばりなさい」という励ましの賞としてありがたく頂戴することにしました。皆様のご指導を受けながら、いい指揮ができるように努力していきたいと思います。

村上 現在、私は本物のピアノの良さをできるだけ多くの方に知っていただくために、全国でレクチャーコンサートを開いています。とてもうれしかったのは、レクチャーを受けた方から「何年も弾いていなかったピアノを調律して弾いてみたらとても楽しかった」というお手紙をいただいたことです。正しく調律したピアノは弾くことが楽しくなります。ピアノを理解して、音楽を楽しんでくれる方が増えることを願って、活動を続けていきたいと思っています。



レクチャーコンサートの様子 ピアニストの堀江真理子さんと